一幼児の紙芝居鑑賞中の反応行動

柳　田　多　聞

Response behaviors of an infant while watching Kamishibai

Tamon YANAGIDA

紙芝居のメディア形態上の特徴

紙芝居は、演者が絵を見せながら物語を語ることで進行する。より詳細に言えば、表側の面に画家の描いた絵が印刷され、裏面に作家の書いた脚本が印刷された「紙芝居作品」を用いて、演者が観客と対面して、絵を見せながら脚本を語る「上演」を行う、という形態をとる視聴覚メディアである。

「紙芝居作品」と「上演」の両者が揃って初めて「紙芝居」であり、そのどちらが欠けても紙芝居は成立しない。文化社会学者のFiske（1982, p.18）はコミュニケーション・メディアを、対面した人々がリアルタイムに交わす肉声や身振りのような「現示的メディア（presentational media）」と、記号表象として記述されることにより時間や空間を越えて繰り返し伝達されることが可能な「再現的メディア（representational media）」とに分類したが、両面に絵と文字が印刷された「紙芝居作品」は再現的メディアであり、演者が観客と対話しながら行う「上演」は現示的メディアだと言える。つまり、「紙芝居」は現示的メディアと再現的メディアが複合した形態をもつメディアである、と言うことができる。再現的メディアと現示的メディアの複合形態は紙芝居を特徴づける重要な特性であり、紙芝居を深く理解する上では欠かすことができない視点として注目したい。

本研究は、そういった紙芝居を体験する中で観客が演者とのコミュニケーションを通じて生み出す反応行動の分析を試みたものである。

紙芝居によるコミュニケーション促進

紙芝居の上演は、豊かなコミュニケーション行動を生み出す。紙芝居は、演者と観客とが対面し、リアルタイムに会話を交わすことが可能な距離でなされる。一般に観客は複数（数人から 50 人程度）の集団である。演者は単に脚本のナレーターを務めるだけでなく、作品の構成によっては、演者自身が観客と会話を交わす場合もある。紙芝居の上演中に、演者と観客の間、観客同士の間で、会話や動作によるさまざまなコミュニケーション行動が誘発される。このコミュニケーションの誘発効果に期待して、高齢者ケアなどさまざまな分野で紙芝居の活用が広がっている（石井，2006）。

紙芝居中の観客の反応行動

紙芝居の上演がもたらす観客の反応行動そのものに直接的に焦点を当てた研究はまだほとんどなされていないが、間接的に紙芝居が用いられた行動研究として、森光・藤原（2011）がおこなった幼児の視聴態度に関する研究がある。

森光らは、幼稚園児 38 名の紙芝居視聴中の態度を観察し、ポジティブな態度（集中している、興味を示し発現する、など）とネガティブな態度（落ち着きがない、まったく違う方を向いている、など）に分類し、座席形態との関連性を調べている。しかし、観客が具体的にどのようなタイミングでどのような反応行動を示したのかには着目していない。

本研究では、一人の観客に注目し、紙芝居上演の流れの中で、どのように反応行動が生成されていくのかを、詳細に記録し分類することを試みた。

多様な反応レパートリーを収集するため、反応行動が豊かな幼児（保育園児）を対象とした。一人の対象者を中心に分析したが、その対象者の反応が他の観客の行動に関連している場合などは、集団全体の状況も含めて検討した。

方　法

観察対象者

長崎市内の一般的な私立保育園児33名（2歳から5歳まで）からなる集団に紙芝居上演をおこなった。その中から、活発に発言をした男児（5歳）を主たる観察記録対象者とした。

手続き

紙芝居の上演および撮影は、2013年7月におこなわれた。観客は日常の保育の中で、毎日のように紙芝居に親しんでいたが、この時の演者たちによる紙芝居上演を見るのは初めてであった。

午後5時前後の“お迎え前”の自由時間に紙芝居上演をおこなった。保育園の園長、保育士2名、ちょうど迎えに来た母親2名も部屋の後ろで一緒に観賞し、リラックスした雰囲気の中で行われた。

この日の紙芝居の演者は、筆者およびゼミ学生（3年生）3名の計4名で、各1作品ずつ上演した。このうち、最初におこなった筆者の上演時の反応を分析した。上演時間は約7分10秒であった。なお、この日の紙芝居上演全体の時間は、約26分であった。

2台のビデオカメラで紙芝居上演を撮影録画した。1台は観客を、もう1台は演者と紙芝居舞台を撮影した。

なお、観客となる保育園児の撮影に関しては、保護者の了承を得ていることを保育園園長に確認して許可を頂いた。

使用素材（紙芝居作品）

使用した紙芝居作品は、まついのりこ（脚本・画）(1984)「るるのおうち」であった。この作品を選んだ理由は、演者と観客との対話場面が多く含まれていて、観客の反応行動が豊かに誘発されると予想されたからである。

この作品は12の場面で構成されている。「るる」という名の傘が風で飛ばされた後、「星の子」の助けを得て、自分の家を探し、見つけて帰る、というファンタジーの物語である。「るるのおうち」を探す際に、観客の意見の助けも借りる、という設定になっており、その「おうち探し」の中で演者と観客の会話が誘発される。

各場面の概略を表1に示す。

表1　紙芝居作品「るるのおうち」（全12画面）　各画面の概要

第1画面	タイトル「るるのおうち」の文字があり、傘の「るる」と「るるの家」の絵が描かれている。壁はるると同じ黄色で、屋根、窓、階段、ドアに、「るる」と似た形状の要素が含まれている。この場面で、観客は「るるのおうち」の各部に注意を促される。
第2画面	突然の風によって、「るる」が飛ばされていく様子。「るる」と風を表す曲線の効果線のみで構成。
第3画面	さらに風で飛ばされ、「るる」が高い木の上の方の枝に引っ掛かって目を回している様子。
第4画面	「るる」が枝から離れ、飛ばされながら落ちていく様子。「るる」はやはり目を回している。
第5画面	「るる」が逆さまになって水面に落ちた様子。青い水面は「海」だと説明される。「るる」は目をつぶっている。

第 6 画面	空が暗くなり、海の上に浮かんだ「るる」（べそをかいている）の元へ、輝く「星の子」が飛んで近づいてきた様子。
第 7 画面	「星の子」が「るる」を手に持ち、空高く飛び上がった様子。「星の子」は、「るる」の家を探そうと、手を眉の上にかざして遠くをみるような仕草をしている。
第 8 画面	「るる」の家とは違う、第 1 の家。壁は白く、屋根、窓、ドア、階段の形状が異なる。
第 9 画面	「るる」の家とは違う、第 2 の家。壁が赤い家で、全体の形も各部も大きく異なる。
第 10 画面	「るる」の家とは違う、第 3 の家。屋根の形だけ丸くて共通だが、それ以外は異なる。
第 11 画面	「るる」の家。「るる」や「星の子」はおらず、家だけが描かれている。
第 12 画面	第 1 画面と同じように「るる」が家の階段におり、「星の子」が空に飛びあがり手を振っている。「るる」も「星の子」もにこにこ笑っている。

作者のまついのりこ氏は「観客参加型」紙芝居という分野を確立させた紙芝居作家である。まつい（1998）は、紙芝居作品を「観客参加型」と「物語完結型」に分類した。「観客参加型」とは、作品中に観客の声かけや動作などによる参加が盛り込まれており、ストーリーの進行に観客の参加が不可欠となる形態をとる作品である。一方、「物語完結型」とは、作品の進行は物語自体で完結していて、観客の参加を必要とはしない作品である。

まつい（1998）は、紙芝居の「演者と観客の対面」という形式上の特性に着目し、演者と観客とのコミュニケーションをより活性化させることをねらって、作品中に観客の参加を呼び掛ける場面を盛り込んだ「観客参加型」作品を次々に創作していったのである。「観客参加型」作品には、具体的なセリフを観客に言ってもらうように呼びかけるもの（例えば「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」（まつい，1983））もあるが、本研究で用いた「るるのおうち」は、「演者から観客への問いかけ」という形で、自発的でかつ活発な観客の参加を誘発する、優れた観客参加型作品である。

反応行動記述方法

反応行動の記述は、時間単位ではなく、演者の行動単位で記録した。観察対象者が何に反応して行動したのか、を明確にするためである。

そのために、まず、録画された撮影記録から、演者の行動を、紙芝居を上演する上で重要な単位となる動作と発言で区切った。そして、演者の各動作と発話の時間ごとに、観察対象者の反応を記述していった。

併せて、観察対象者以外の観客の反応を記述した。観察対象児の行動や演者の行動の理由を理解し、また、紙芝居上演全体の雰囲気や流れを理解するためである。

結　果

演者の動作および発言、それに対する観察対象者の反応行動を記録したものを、表 2 に示す。

表２　紙芝居上演中の演者と観察対象児およびその他の観客の行動

かぎかっこ（「」）でくくられた文字が発話内容であり、それ以外は動作である。観察対象児の発言には、かっこ（）内に分類名を付した。なお、演者の発話の欄で**太字**になっている部分は、脚本として印字されているセリフである。それ以外は演者がそれぞれの場面において臨機応変に対応した発言である。

時間（分：秒）	演者動作	演者発話	観察対象児の反応行動	他児の反応行動
0:00.0	おじぎ	「こんにちはー」	「こんにちは」（返答）	「こんにちは」多数
0:02.8		「紙芝居始めまーす」		１人が拍手をすると、4・5人が拍手
0:11.5	舞台に作品を挿入		「あ見えた、うわ、おうちだおうちだおうちだ・・・かさとおうち」（指摘）	指差し「るるのおうち」
0:15.8	扉の鍵はずし			
0:17.5	扉開け（右）		「開(あ)いた」（指摘）	他に２名が続けて「開いた」
0:20.9	扉開け（左）	「開いたね」		
0:24.7	扉開け（上）〔第１場面提示〕			「なんだこれ、かさのうちじゃん」
0:27.5	観客を見回す			「かさのうちだー」
0:30.8		「そうね」		
0:32.8		**「脚本・絵、まつい、のりこ」**	「まつり、のりこ」（追唱）	
0:37.7	頷く（「まつり」に応えて）			
0:39.5		**「るるの、おうち」**		「かさのおうち」
0:45.4		「そう、**これは**」	「かさのおうち」（指摘）	
0:48.4		「そう、**かさの、るるの、おうちですよー**」	「るるー？・・・・・るる」（追唱）	「へへへ（笑）」「え？こんなだったっけ？」
0:56.3		**「るると、にてるでしょう？」**	「うん、るるとるる」（返答）指差しながら	
1:03.0	覗き込み	**「やねの形を見てちょうだい」**	「あ、おんなじ」（指摘）	「おんなじ」「かさだ」「かさだ」
1:07.0	覗き込み	「ねぇー」		
1:08.5	覗き込み	**「まども、よおく見てちょうだい」**	つぶやくように「かさ」（指摘）	「かさだ」「あ、おんなじ」「おんなじ」「持つところがおんなじ」
1:16.1	覗き込み	「ねぇ」		「持つところが」
1:17.4	覗き込み	「持つところがある」		
1:19.1	覗き込み	**「階段だって、似てるでしょう」**	「うわぁーー・・・」（感嘆）「うん」（返答）　うなずく	「かいだん？」「うん」「あ、かさのここ」
1:26.6	裏を見て	**「わたしのおうち、いいおうちでしょ？」**	笑顔になって「うん」（返答）	「うん」「うん」
1:31.3	覗き込み	**「るるが、にこにこー」**		
1:34.9	観客を見て	**「そのとき、風が」**		
1:38.3	抜きながら〔第２場面提示〕	**「びゅー」**	「うわぁーー」（感嘆）	「あーー」
1:43.1		**「あれれれ、れ、れ、れ、れ、れー」**	（「れ、れ、れー」の終わりで）「ははは」と声を上げて笑う	笑い多数「おもしろーい」

時間（分：秒）	演者動作	演者発話	観察対象児の反応行動	他児の反応行動
1:51.5	抜きながら〔第３場面提示〕	**「びゅー」**	「わぁ」（感嘆）	笑い多数
1:59.3	眉をひそめて	**「うわぁー、怖いよー」**	セリフの間、急に真顔になる セリフが終わると笑顔に戻る	対象児と同様の反応が多数
2:03.6	覗き込み、観客を見て	「るるは、高ーい木の枝に、ひっかかってしまいましたー」	「じゃんさんさん（意味不明）」	
2:11.7		**「うちに、帰りたいよー」**		
2:15.3	画面揺らし	**「るるが、からだをゆすぶると」**		
2:20.4	さっと抜きながら〔第４場面提示〕	**「あれー」**		「あ、手が見えた」（画面持つ演者の手を見て）
2:27.0	画面揺らし（回転）	**「目が回るー」**		笑い 手をぐるぐる回す
2:33.6	抜きながら〔第５場面提示〕	**「ぴっちゃーん」**	「わあぁーははは」（感嘆）	「かわいそうだ」 「かぜみたーい」
2:41.3	覗き込んでから	**「海の上だ」**	「海の上」（追唱）	
2:45.0		**「だんだんと」**		
2:47.5	抜きながら〔第６場面提示〕	**「夜になってきましたー」**		
2:53.1	画面を半分抜いたところで止める			「よるに、だんだんなってきた」
2:57.1	覗き込み	**「うちに、帰りたいよー」**	周囲の子らの動きに反応して、横と後ろを見回す	「なんで」
3:01.1		**「るるが、叫んでいると」**		
3:05.8		**「ぴかー」**		
3:07.0	残り半分を抜く		「お星さま」（指摘）	「あ、お月さまだ」 「お日さま」
3:14.0	覗き込み	「そうだねー」		
3:15.0		**「空から、星の子が、降りてきました」**		「ぴきーらー！（意味不明）」
3:22.3		**「ぼくが、うちに、連れて帰ってあげるよ」**	「え」（感嘆）	「知ってるのかな？」 首をかしげながら
3:28.9		「知ってるのかね？」		
3:30.3	抜きながら〔第７場面提示〕	**「そしてね」**		
3:36.9		**「るるを連れて、」**		「あ」
3:39.0	観客を見て	「空に飛び上がりました」	「わぁ」（感嘆）	「わぁ、すごい」
3:43.3		**「るるのうちは、どれなのかなー？」**	「かさ」（指摘）	「おうち、ここ」
3:49.3		「みんなも、みんなも探すの、手伝ってねー？」	手を目の上にかざし遠くを見るしぐさ（星の子と同じしぐさ）	「うん」やうなずき、多数
3:54.0	ゆっくり抜く〔第８場面提示〕			「ちがう」「それじゃない」など、多数
3:59.6	観客を見る			「あのねー」などめいめいに説明し始める
4:00.9	覗き込んでから観客を見て	**「このうちかな？」**		「ちがう」など言いながら首を横に振る、多数

時間（分：秒）	演者動作	演者発話	観察対象児の反応行動	他児の反応行動
4:04.3		「えー？**どこが違うの？**」	指差しながら「ここ」（返答）	指差す子が５名。全体にがやがや
4:08.0	覗き込む			「上！」「てんじょうが違う」「ドアとか」
4:09.0		「天井が違う」		「かいだんも違う」「あの、あの・・・」
4:13.7		「階段が違う」		「まど」「ドア」「やねも」
4:16.5	覗き込む	「あっ、ドアも、屋根も」	「じゃ、あけてみれば？」（提案）	「まどがちがう」
4:21.0		「じゃ、違うんだね、このおうちは」		「うん」　うなずき「かいだんも違う」
4:26.4	抜きながら〔第９場面提示〕	「そっかあ」	急に指差して「あ、ここもちがう」（指摘）	
4:32.5	観客を見て		「ちがう、ちがう」（指摘）	見え始めると、前よりもっと大騒ぎで「ちがーう」多数
4:34.5		「あれ？」		
4:36.5		**「これも違う？」**	「ちがう」（返答）	「やねもちがう」「かいだんもちがう」
4:39.0		**「どこが違うの？」**	指差し	指差しながら、大声で説明する、多数
4:41.4	覗き込む			同上
4:42.8		「屋根も違う、ドアも、階段も違う」		同上だが、少しずつ収まってくる
4:48.1		「じゃ、違うの」	「あ、け」（指摘？）	静かになる
4:49.5		「違う？違うー」	「うん」（返答）	「うん」うなずき
4:54.2	抜きながら〔第10場面提示〕	「じゃあー」		次の家が見えた途端「あー！」
4:59.0	観客を見る		「ちがーう」（指摘）こまかく首を横に振りながら	「ちがう」大げさに首を振るなど、大騒ぎ１人は耳をふさぐ
5:02.8		**「このうちはどう？」**		「それじゃなーい」「窓が違う」など。
5:06.8	覗き込む	「えっ」		
5:08.5	観客を見る	「あ、**なんだか、るるのうちと似てるよね**」		「うん」「いいや」「にてなーい」うなずき、首振り、両方する子も
5:13.9	首を振りながら	「ううん？似てない？どうして？」	「だって、そこのドア」（返答）	説明する子は大声になるが、５・６人に限られる
5:20.0	覗き込む			「まる、まる」「あそこに紫の・・・」
5:22.4		「あっ、丸が、紫の棒が、ない」		静かになる
5:28.2	裏を見ながら	「そっかあ」		
5:30.3	抜きながら〔第11場面提示〕	「じゃあ」	笑顔になり「そう、そう、そう」（指摘）	再び、多くの子が見え始めた途端に「そーう！」「それ！」

時間（分：秒）	演者動作	演者発話	観察対象児の反応行動	他児の反応行動
5:34.0	観客を見る			「それ、それ」 指差す子が２人、
5:38.0		「これ？**このうち？どうして？**」	「うん」（返答） （どうして？に応えて）指差し	「うん」　うなずき
5:41.4	覗き込む			「だって、てんじょうが」
5:44.7	観客を見る	「おお、それから？」		「かいだん」 「かいだんもドアも」
5:46.5	覗き込む	「階段も、ドアも		「そうして、ここらへんが紫のとこだから」
5:51.5		「紫のとこもあるのか」		
5:53.9	抜きながら覗き込みつつ 〔第12場面提示〕	**「ほんとにるるのうちかなー？」**		「うん」「そう」うなずき 「だって、住んでるんだよ」「ほら、みて」
6:03.8		**「るるがおうちに戻ってるねー、やっぱりこれはるるのうちなんだね」**	「うん」（返答） 笑顔	「うん」　うなずき
6:11.6		**「るるは大喜び。 みんな、ありがとう！」**	「ばいばーい」（手を振る星の子を見て？）	（ありがとうと聞いて）「うふふ」と笑う子１名
6:16.2		「星の子が手を振って、」		
6:19.5	覗き込む	**「よかったねー、みんなのおかげで るるのうちが見つかったよ」**	笑顔	「わーい」
6:27.2		「わーい」		
6:28.5		「じゃあ、ぼくも空に帰るね、ばいばーい」	「ばいばーい、ばいばーい」（返答） 手を振る	笑い、手を振る 「ばいばーい」
6:37.0		「だんだん、朝になって」	「あさ」（追唱）	「あさー？」
6:42.0	抜きながら〔第１場面に戻す〕	「朝になってきたよ、おうちに帰った**嬉しそうなるるの顔をみてねー**」		「え、見ない」
6:51.8	覗き込む		「あ、見た」（指摘）	
6:52.4	観客を見て	「**よかったねー**（「おしまい」と言おうとして、止める）」		「おしまーい」 「・・・見たい」
6:57.0		「何みたい？」		「つづきー」
7:00.0		「そうだね、おしまい」	「おにいちゃん・・・（他児の声に埋もれて聞き取り不能）」	「つづきー」 「もっと見たい」
7:02.7	扉閉じ			「まだ見たーい」 「つづき見たい」
7:08.9		「もっと見たいの？」		「うん」「見たい」

作品の上演中に対象男児が反応行動を起こした回数は 43 回であった。このうち、発話が 38 回、指差しやうなずきなどの身振りや表情の変化といった動作が 15 回、そのうち何回かは動作と発話が重なっていた。
これらの分類を考察で試みる。

考　察

反応行動の分類

観客の反応行動を大きく「発話」と「動作」に分類した。それぞれをさらに以下の下位カテゴリーに分類した。

「発話」は「返答」「指摘」「感嘆」「提案」「そ

の他」の５つに、「動作」は「うなずき・首振り」「指さし」「表情変化」の３つに分類した。以下、それぞれについて詳しく考察していく。

発話：返答

演者が始まりの挨拶をしたときの「こんにちは」や、演者からの問いかけへの「うん」「ちがう」などを、「返答」とした。演者からの働きかけに対して直接的な反応を行ったものである。中には、演者でなく、登場人物のセリフとしての「バイバーイ」に対して「バイバーイ」と応えるものもあった。

紙芝居の上演では、演者が観客と対面して位置することによって、リアルタイムに言葉を交わす機会が生まれ得る。その最も直接的な関わりの形として、「呼応（呼びかけと応え)」と「問答（問いかけと答え)」がある。「呼応」の形として、言うべきセリフを観客に示して一緒に言ってもらう、という「発声の促し」タイプがある。「観客参加型」作品の代表的なものに「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」（まついのりこ，1983）がある。この中では、演者が観客に「みんなで、一、二の三で、「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」って、言ってみて。」と呼びかける。「さあ、一、二の、三。」と号令をかけて、観客が一緒にセリフを唱えると、前の画面で小さかったものが次の画面では画面いっぱいに大きくなって登場する（セリフに合わせて演者が画面を引き抜く)。

この場合の観客の反応は、演者の指示に従っておこなった、という意味で、「受動的反応」と呼べる。(ただし、演者の指示に従うか否かは、観客個人の意志に任されるのだから、完全な反射的な行動ではなく、主体的な行動である。)

一方、「問答」の形では、演者は何らかの疑問を提示して観客に各自の考えを示すように促す。本研究の「るるのおうち」ではこのタイプが採用されていた。

「るる」のおうちを探す場面で、違う家が次々に示されては、「このうちかな？」「どこが違うの？」と問いかけ、正解の家が現れた時は、「このうち？」「どうして？」と問いかける。このコミュニケーション活性化の仕掛けは、回を重ねるごとに観客の反応を増大させていった。

問いかけが、いわゆる「オープンクエスチョン」なので、観客の子ども達はめいめいに、自由な観点での返答を返す。答えるか否かの判断も含めて、「能動的反応」が主体的に行われている。

オープンな問いかけをし、観客各自の自由な返答を待つ、という形態は、紙芝居という形式の可能性を大きく活かした、コミュニケーション活性化の形であると言えよう。

発話：指摘

「返答」よりも、さらに能動的な反応として、観客自身の気づきを表現した「指摘」と呼ぶべき行動がある。

例えば、紙芝居の始まりで演者が観客の前で作品を舞台に挿入する際や、舞台の扉を開ける際、対象男児は。「あ、見えた」「開いた」などと発言した。

「指摘」には、独り言のようなつぶやきと、その気づきを他者に知ってもらいたい宣言とがある。

第１画面で、傘と家が描かれているのを見て、対象男児を含めて何人かは「かさのうちだ」と大声で指摘した。自分が気付いたということを認めてほしい「承認欲求」の表れと見ることができよう。

また、演者が「るる」の家の形が、「るる」と似ているところに注意を促す場面では、「やねの形を見てちょうだい」「まどもよおく見てちょうだい」と水を向けると、「あ、おんなじ」「かさだ」などといった気づきを述べる子が多数いた。

注意すべきなのは、このやりとりは先述の「問答（問いかけ－答え)」とは意味合いが少し異なることである。問いかけのようにはっきりと答えを要求するのではなく、「(どこかを）見て」と求めただけで、その実行に伴う

感想や気づきを、観客たちが進んで表明してくれた、ということである。このことは、観客の子らが演者と積極的にコミュニケートしようとしている姿勢の表れと捉えることができよう。

また、演者の言いなりになっているわけでもないことは、後半の第10画面で「るる」の家ではない家を指して演者が「なんだか、るるのうちと似てるよね」と言っても、同意する子と「似てない」と反対する子がいる点に示されている。観客の子らは、あくまで各自の主体的な意見を述べようとしていた、と考えられる。

発話：感嘆

観客の主体的な反応として、感情的な思いの発露、すなわち「感嘆」がある。新たな画面が出現した際の驚きは、画面を抜くことによって場面が進行していく紙芝居の特性ならではの反応である。

また、物語の中で生じた出来事や、登場人物が味わった体験に対する共感が「感嘆」の声となって現れる場合もある。予想外の場面展開に対する驚きや疑問の「え！」「え？」も感嘆とみなせる。

発話：提案

さらに主体的・能動的な反応として、自分の提案を述べる場合がある。

第8場面で見た家が「るる」の家とは異なると分かったとき、対象男児は「じゃあ、開けてみれば」と述べた（4:16.5の発言）。何を開けて確かめようという意味か、定かではないが、いずれにしても、演者あるいはこの場に対して、「何かしよう」という考えを提言したわけである。ここにも、積極的な参加の意思が読み取れる。

発話：その他

その他の発話の中で、今回、最も多く見られたのは「笑い声」であり、その他には紙芝居とは無関係の発話である。観客集団は近くに集まって見ているので、周りの人の動きや音に、敏感に反応しやすいと言える。

また、演者の言葉を「追唱」する発話も時おり見られた。

疑問を感じている場合と、受容してつぶやいている場合とがあるように見受けられた。次に、動作について詳しく述べる。

動作：うなずき・首振り

動作の中で最も多いのは、「同意」のうなずきと「否定」の首振りであった。「同意」のうなずきは、先述した発話の中での「問答」に対する返答と同様の意味をもつものである。しかし、それだけでなく、今回の記録には見られなかったが、物語を聞き進める中での「理解」の表れとしてのうなずきもある。本研究でとりあげた「るるのおうち」では、「るる」の家か否か、が問題の焦点になるので、同意と否定の動作が特に多数、しかも大きな動作で見られたが、演者と対話する性格の強い作品では、観客自身の意思の表現であるこれらの動作は多数見られると思われる。

動作：指差し

観客の意思を明確に示し、且つ、演者と理解を共有したいという意志の表れと考えられるのが「指差し」である。

「指差し」とは、コミュニケートする相手の注意を、共通認識の対象に向けて喚起させよう、という道具的な動作（オペラント行動）である。つまり、たとえそれが、問いかけに対して起こったものであったとしても、指差しは主体的・能動的な反応だと言える。なぜなら、指を差す対象は行為者自身が選ぶものだし、指差しをするか否かも含めて、差し方の勢いなど、行為者の判断に大きく依存する行動だからである。

ただし、今回の観察においても、指差しを盛んに行う子とそうでない子がおり、個人差が大きいと言える。指差しをおこなった子は、一緒に見た33人中8人であった。

動作：表情変化

指差しよりも無意識的に生じる行動として、表情の変化に注目すべきであろう。表情は感情の表現（意識的・無意識的）であり、観客が瞬間的に抱いている感情を推測する手段になりうる。また、物語の理解（疑問、了解）の手がかりにもなりうる。

本研究で観察した幼児では、多くの観客が目を見開き、口元が緩んで少し開いた、いわゆる「興味」(Izard, Dougherty, & Hembree, 1983）の表情を示す時間が多かった。「興味」がベースとなり、時おり「喜び」の笑顔を示すのであるが、笑顔にも、声を立てる「笑い(laugh)」とにっこりとした「微笑み（smile)」とがあり、意味合いが異なると思われた。

例えば、観察対象児が声を上げて笑ったのは、演者のセリフの響きが可笑しかった「あれれれ、れ、れ、れ、れ、れー」の時だけで、そこでは多くの他の子も笑っていた。それ以外に、微笑みを浮かべる瞬間がこまごまと存在していて、それらは、主人公の言葉や、探していた家が見つかった安心などへ共感した場面だと言える。また、逆に、主人公が困ったり悲しがったりする場面では、笑顔がフッと消えたりしていた。観察対象児はこの作品に関しては、高い共感を示したのではないかと思われる。

表情の変化を細かにたどることは、紙芝居作品が伝える内容に対しての、理解と共感の時系列的な変化を捉える指標の一つとして注目していきたい。

終わりに

今回の観察記録で観客の反応行動を分析する試みによって、紙芝居というメディアがコミュニケーションを豊かに活性化させる可能性を持っていることが、改めて確認できた。紙芝居を楽しむということを通じて、観客は自発的・能動的に発話や動作を生み出し、演者と共に作品の世界に共感しながら、自己の世界を豊かに味わっていける、と言えよう。ただし、観客の反応行動には幅広いバリエーションがあり、非常に大きな個人差があることも伺えた。作品を構成する要素や、演者の上演中の振る舞いが、何らかの形で観客の反応行動を誘発することは間違いないが、それらがすべての観客に対して一様に働きかける訳ではないことを、深く留意しながら、今後、詳細に分析検討していくことが必要であろう。

引用文献

Fiske, J.（1982）*Introduction to Communication Studies*, Routledge.

石井良信（2006）「子ども向けから老人向けへの実践」，遠山昭雄（監修）『はじめよう老人ケアに紙芝居―観ること、つくること、演じることの楽しみ』，雲母書房，pp.128-137.

Izard, C., Dougherty, L., & Hembree, E. (1983). *A system for identifying affect expressions by holistic judgments (AFFEX)*. Newark, DE: University of Delaware, Instructional Resources Center.

まついのりこ（脚本・画）(1983)『おおきく　おおきく　おおきくなあれ』，童心社

まついのりこ（脚本・画）(1984)『るるのおうち』，童心社

まついのりこ（1998)『紙芝居―共感のよろこび』，童心社

森光彩・藤原正光（2011）「集団場面での紙芝居の読み聞かせにおける幼児の視聴態度に関する研究 －視聴座席形態・年齢要因・視聴時間からの検討－」，文教大学教育学部紀要，45巻，39-47.